

教員の同僚性を高める協働的な取組の在り方

— 道徳教育における若手教員への支援を通して —

企画開発室 長期研修生 教諭 濱本 沙和佳

【要 約】

学校が抱える問題は、複雑化・多様化しており、組織で対応する必要性が高まってきている。そこで、学年部における教員の同僚性を高めることを目的として、全ての教員が関わる道徳教育に着目し、「リレー道徳」を柱とした授業実践等を通して、協働的な取組の在り方について研究した。若手教員が道徳科の授業で抱えている課題の解決に、学年部の全教員が対話と協働によって組織的に取り組むことは、学年部の同僚性を高める一助となった。

【キーワード】 同僚性 対話と協働 リレー道徳 つなぎ役

1 研究の目的

グローバル化が進展し、様々な価値観を背景とした社会において、学校が抱える問題は複雑化・多様化しており、教員個人の資質能力に頼るだけでは対応が難しく、組織で対応する必要性が高まっている。また、定年によるベテラン教員の大量退職、ミドルリーダーとなるべき年齢層の相対的な少なさ、新規採用教員の増加など、教職員の組織における年齢や経験年数の不均衡化にも直面している。そして、教員の多くは、経験年数等にかかわらず、様々な校務分掌を担当しなければならず、多忙感を感じている。多忙感は、教員の心のゆとりを奪い、視野を狭くさせ、職場における日々のコミュニケーション不足から「個業」や「孤業」の状況に陥りやすくさせている。こうした状況を回避するには、教員間の支援やつながりを充実させ、同僚性を向上させる手立てを意図的に仕組む必要がある。そうすることで、日常の会話が増え、安心できる居心地の良い職場環境が構築され、諸課題を組織で対応する雰囲気醸成や個々の多忙感の軽減を図ることができると思う。

長澤・堀江（2021）は、同僚性を「現場研究者である教師が、互いの不十分さを責め合うことなく信頼の中で協働し、支え合い高め合える関係性」と定義している。また、「同じ目標や展望に向かって、教師一人一人が個々に実践を積み重ねる過程で生まれる協働の中で同僚性は構築されていく。」「同僚性を築くためには、つなぎ役を担える教師、もしくはその役目を意識して取り組む教師がいることが重要な要素と言える。」とまとめている。

そこで、教科担任制である中学校において、全ての教員が関わる道徳教育に着目し、道徳科の授業等の支援を組織的、協働的に行うこととした。道徳科は、「人としてのよさ」を見つめることを特質としており、肯定的な人間関係やつながりを目指す教科である。これは、全教育活動や生徒理解、人間関係の構築につながる重要な要素であり、同僚関係においても大切な視点だと考える。文部科学省が実施した「道徳教育実施状況調査」（令和3年度）によると、道徳教育を推進する上で最も多い課題は、「学校の道徳教育の重点や推進すべき方向について教師間での共通理解や連携を図るための機会の確保」であった。

本研究の対象となる学年部の学級担任は、3名のうち2名が新規採用教員と2年目教員で、初めての学級担任である。道徳科の授業経験は浅く、学年部の教員や道徳教育推進教師等によるサポートが欠かせない。「リレー道徳」という若手教員にとって必要感のある授業実践の中で、学級担任や学年部の教員、道徳教育推進教師が連携を図り、対話と協働を積み重ねながら、教材研究や授業づくりに取り組むことで、学年部の同僚性を更に高めたいと考えた。併せて、「小さな道徳」という短時間で行う心の教育を、計画的かつ組織的に行い、教員間の道徳教育に対する共通理解を深めながら、学年部の組織の活性化を図りたいと考えた。

以上のことから、若手教員が所属する学年部を対象に、道徳教育における取組と組織において必要不可欠なコミュニケーションの活性化を目指した取組を通して、教員の同僚性を高める協働的な取組の在り方について研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 道徳教育における取組

ア 道徳科の授業スタイルの確立

道徳科の意義や方針、授業の進め方について基本的な考え方を示した「道徳科の時間」授業スタイル（授業展開のポイント）」を作成した（図1）。夏季休業中に、道徳科の授業は、生徒たちが「人としてのよさ」や「よりよい生き方」に出会う場であることと、道徳科の授業において教員が生徒たちの発言を丁寧を受け止め、全ての生徒の存在を平等に認めることの重要性について、研修の機会を設けた（図2）。

研修講師を招へいし、道徳科の授業についての研修の機会を持ったことで、「教材が変わっても押さえるべきポイントや考え方は共通のものがあり、それを見抜くことで授業がより効果的になることを再認識できた。」という声が聞かれるなど、道徳科の授業における共通理解を図ることができた。この研修により、組織が同じ目標に向かって取り組むためには、共有ビジョンを提案することが必要であると実感した。

イ 授業構想シートによる学習ビジョンの共有

横山利弘（元文部省教科調査官）が提唱する、子どもの心に目を向けた「タマゴッチ理論」を用いた教材分析表と、学習の流れを示した学習指導案を合わせた授業構想シート①を作成した（図3）。学年部で協議しながら、教材分析表における卵の形の上半分である「行動・言葉」を問うような発問ではなく、下半分の「心」を問い掛ける中心発問と問い返しの発問の作成にこだわり、生徒たちが道徳的価値について考えを深められる展開づくりに努めた。授業構想シート②には板書計画を記載し（図4）、授業構想シート③には授業後の振り返りを記入することとした（図5）。授業構想シート③を用いて、反省点や改善策等を引き継ぎ、教員間で交流の機会を持つようにした。

学習を進める上でのビジョンを共有し、授業構想シートを用いて実践をしたことで、「授業を進めやすい」「道徳科にも、教材が違って使える共通の授業構想シートがあるのがいい。」という意見が聞かれた。また、道徳科の授業経験の浅い若手教員からは、「タマゴッチ理論は考えやすかった。」という声が聞かれた。よって、共通の形式を用いて授業の流れを作成することは、教材への理解を深めて道徳科の授業を行う一助になった。

「道徳科の時間」授業スタイル（授業展開のポイント）

道徳科 「人としてのよさ」に気付く 対話による気付き 受容的に認め合う

【・・・道徳科の授業を進める上での心得・・・】

重要 よい心は、誰でも持っている。人間は、悪いところは目に付くが、よいところは目に付きにくい。それは、教師でも同じ。よいところは、意識しないと見えない。よいことのレベルは人によって違う。

道徳科の授業くらいは、人のよいところを見付けよう。

人のよさには、自分の中によいところがあるから気付ける。人のよさに気付ける感性は、言葉にすることで少し大きくなる。そして、自分の心の中にあるよさが豊かになる。

登場人物になり代わる。登場人物の着ぐるみを着て、子どもに語る。【自我関与】
全ての子どもを平等に認める。

教師「すごい！そんなことに気付いたんやね！」…こういう瞬間を限りなくつくる。
子どもが気付いたよさを周りが受け止める。

自分の思いを受け止めてくれる → 自己肯定感が上がる

道徳科は、自分自身と周りの仲間を大事にする時間。

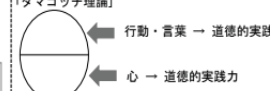
短い評価「すごい。そこに気付いたのか。」教師が短い言葉の引き出しを持っておく。

道徳科は合意形成を図ってはダメ！

基本 発問（中心発問・問い返しの発問）を二つは用意しておく！

- ・誰が中心人物なのか。
- ・人としてのよさに気付いた場面
- ・葛藤にぶつかる → よい方向に

「タマゴッチ理論」



（注意）葛藤にぶつかる場面 → 中心発問は、ここではない！！

図1 「道徳科の時間」授業スタイル（一部抜粋）



図2 研修の機会提供

リレー道徳スタート作成者（ ）

授業構想シート①

教材【銀色のシャープペンシル】 内容項目 よりよく生きる喜び】

教材分析表

<p>登場人物（ぼく、健二、卓也）</p> <p>行動・言葉 「自分で買ったんだぞ。健二、変なことを言うなよ。」</p> <p>心 シャープペンシルをとったんじゃない。卓也のものだとばれたくない。</p>	<p>行動・言葉 もう一人の自分が、（このまま黙ってればいいさ。）とささやいてくる。</p> <p>心 シャープペンシルはちゃんと返した。自分は悪くない。黙ってればよかった。</p>	<p>ぼくからの電話するの心はゆれ動いてたという声</p> <p>中心発問</p>
--	---	---

<Before 道徳的变化の前> <After 道徳的变化の後>

学習指導案（自我関与型）

学習活動	時間	主な発問と予想される生徒の反応
導入 (範談含む)	7分	(オリオン座の動画を見せる) この星座知ってる？ 星を見たら、みんなはどんなことを思う？ (あらすじをさっと話しながら中心発問へ)
基本発問	8分	理科の授業で、シャープペンシルのことが3人で話題になった後、ぼくは、健二や卓也のことをどのように思っていたのだろう。
中心発問	15分	ぼくは、どんな気持ちで「思い切り深呼吸をした。」のだろう。 ・卓也に謝ろうという気持ちが決まったから。 ・自分のするさに気付き、自分自身を変えようと思ったから。 ・今までの自分と決別しようとする思いの表れ。 ・合唱コンクールのときのような思いをしたくないと思ったから。
問い返しの発問	10分	卓也の家にわざわざ行く必要があったのだろうか。それはどうしてか。 ・自分の思いをちゃんと卓也に伝えたかったから。 ・卓也のまっすぐな気持ちにちゃんと向き合おうと思ったから。 ・今までの自分とは違う自分になったから。 ・自分を正当化し続けてきた自分が嫌だったから。
終末	10分	今日の授業を通して考えた自分の気付きや考えを改めてまとめてみよう。(→発表)

図3 授業構想シート①

授業構想シート②		リレー道徳スタート作成者 ()
教材【全校一を目指して】	内容項目【よりよい学校生活、集団生活の充実】	板書計画
梅沢 圭司	よりよい学校生活、集団生活の充実 全校一を目指して	① アルミ缶の回収 (二人五出) ② 整理の仕事 真美 代表委員 山紀 美化委員 竹田さん お年寄りの施設での経験 喜んでもらった 役に立てることをしたい
真美	・朝、悟、真美には、それぞれ足りない部分がある ・朝、悟、真美には、それぞれ足りない部分がある ・自分がやっていないのは事実なのに、認めていない ・悟：そもそも目標を見失っている、なんのために ・真美：相手の事情を考えず、自分の考えを押し付け （一） 圭司、悟にも同じ	・どうしておれだけに言うんだよ。 ・朝、悟があるからじゃない。 ・最近、アルミ缶は落ちてない。 ・家から無理して持ってきているんだ。 ・みんなで話し合ってたのだから、協力しな ・反対しなかったのだから、協力しな
安達 悟	・朝、悟、真美には、それぞれ足りない部分がある ・自分がやっていないのは事実なのに、認めていない ・悟：そもそも目標を見失っている、なんのために ・真美：相手の事情を考えず、自分の考えを押し付け （一） 圭司、悟にも同じ	・どうしておれだけに言うんだよ。 ・朝、悟があるからじゃない。 ・最近、アルミ缶は落ちてない。 ・家から無理して持ってきているんだ。 ・みんなで話し合ってたのだから、協力しな ・反対しなかったのだから、協力しな
真美	・朝、悟、真美には、それぞれ足りない部分がある ・自分がやっていないのは事実なのに、認めていない ・悟：そもそも目標を見失っている、なんのために ・真美：相手の事情を考えず、自分の考えを押し付け （一） 圭司、悟にも同じ	・どうしておれだけに言うんだよ。 ・朝、悟があるからじゃない。 ・最近、アルミ缶は落ちてない。 ・家から無理して持ってきているんだ。 ・みんなで話し合ってたのだから、協力しな ・反対しなかったのだから、協力しな

図4 授業構想シート② (一部抜粋)

授業構想シート③ (授業後振り返り)【傍観者でいいのか】					
学習指導案					
学習活動	主な発問と予想される生徒の反応				
中心発問	<table border="1"> <tr> <th>① () 先生</th> <th>② () 先生</th> </tr> <tr> <td>○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。(はっとする、とは何かに気付かされるという状況だね。何に気付いたのだろう。)</td> <td>○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。 ・助けたい気持ち ・Cさんはちゃんと行動できたのに、私は行動できなくて情けない気持ち。 ・最初から話を聞いてあげればよかったという気持ち。 ・何であの時止めなかったのだろうという気持ち。 ・Cさんは積極的に行動していて、自分が恥ずかしい気持ち。</td> </tr> </table>	① () 先生	② () 先生	○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。(はっとする、とは何かに気付かされるという状況だね。何に気付いたのだろう。)	○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。 ・助けたい気持ち ・Cさんはちゃんと行動できたのに、私は行動できなくて情けない気持ち。 ・最初から話を聞いてあげればよかったという気持ち。 ・何であの時止めなかったのだろうという気持ち。 ・Cさんは積極的に行動していて、自分が恥ずかしい気持ち。
① () 先生	② () 先生				
○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。(はっとする、とは何かに気付かされるという状況だね。何に気付いたのだろう。)	○「はっとした」とあるが、私はどんな気持ちだったのだろう。 ・助けたい気持ち ・Cさんはちゃんと行動できたのに、私は行動できなくて情けない気持ち。 ・最初から話を聞いてあげればよかったという気持ち。 ・何であの時止めなかったのだろうという気持ち。 ・Cさんは積極的に行動していて、自分が恥ずかしい気持ち。				

図5 授業構想シート③ (一部抜粋)

ウ 「リレー道徳」の実践

夏季休業中に、若手教員と協働して「リレー道徳」の教材準備を進めた。本研究では、9週にわたって「リレー道徳」を実施するため、学級担任一人が三つの教材を準備した。中心発問と問い返しの発問の作成や授業の流れについて意見を交わしながら準備を進め、授業構想シート①・②を完成させた。「リレー道徳」の実践では、教材を引き継ぐ順番を工夫し、先輩教員から若手教員が授業の進め方等を学ぶことができるようにした(図6)。また、指導内容を互いに話し合いながら、よりよいものに改善し、教員の指導力向上を図った。スクール・サポート・スタッフに板書の撮影や写真の印刷、ファイルの整理などの協力を仰いだり、道徳教育推進教師に「リレー道徳」実施後の打合せでのアドバイスを依頼したりして、学年部外の教職員の協力も得てサポートした。

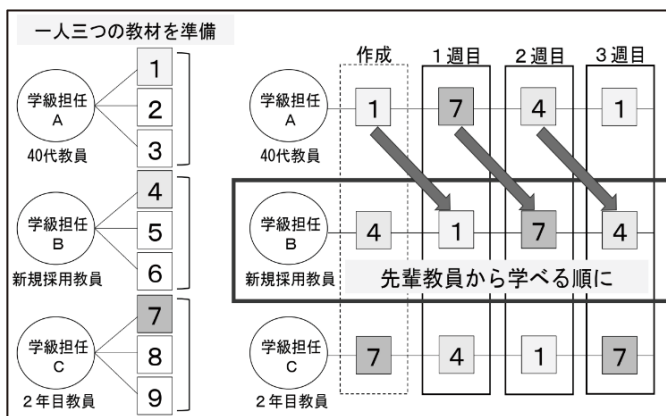


図6 「リレー道徳」の実践の仕方

打合せの時間を設定し、先輩教員と若手教員が共に準備を進めたことで、若手教員から「担当教科より道徳科の授業に困っていた。今回このような時間がなかったら勉強する機会がなかった。」「先輩教員に協力してもらい、事前準備に時間を掛けることができた。そのため、自信を持って授業ができた。」という声が聞かれた。若手教員との協働を通して、周りの教員が若手教員の困り感や課題解決に寄り添い、相手のことを理解しようとする姿勢が大切であると感じた。そして、共に取り組もうとする姿勢が、若手教員の安心感ややる気につながってくると実感した。

「リレー道徳」実施後の打合せでは、教員間で率直な意見交換が行われた(図7)。学年部所属の教員からは、「「リレー道徳」の打合せが、他の話題を話し合うきっかけになった。」「学年部で情報交換をする機会を確保できたこと自体が貴重な実践だった。」という意見が聞かれた。これらのことから、日々の業務に追われる中でも、意図的に話し合う場を設定し、意見を交わしたり情報交換をしたりすることが、いかに重要であるかを改めて確認するとともに、学年部と学年部外の教員、学年部内の教員間の「つなぎ役」となる教員の存在の必要性を感じた。

「リレー道徳」の実践では、授業の反省を次の授業者に引き継いで実施したことで、若手教員から「先輩教員が作った授業の流れは、生徒からスムーズに意見が出てすごくやりやすかった。」と



図7 「リレー道徳」打合せの様子

いう声が聞かれ、授業への不安を軽減することにつながった。40代教員からは、「自分の中で道徳科の授業の流れが固まっていたけれど、若手教員が作成した中心発問と問い返しの発問で授業を行う流れはとても良かった。」という声が聞かれるなど、40代教員の授業改善にもつながった。また、「学級担任の授業準備が3分の1で済むため、授業の負担軽減にもなっている。」という声も聞かれた。

「リレー道徳」の引き継ぐ順番を工夫することで、自然な形で会話が増え、先輩教員から若手教員が学ぶだけでなく共に学び合うことができ、他の教員にとっても、自分の授業を見つめ直す良い機会になった。

エ 「小さな道徳」の実践

道徳教育推進教師が中心となり、道徳部会で「小さな道徳」の実践計画を立案した。道徳部会で教材を用意し、データを共有化することで、どの教員も容易に扱うことができるようにした。朝の会や終わりの会の5分間を使って、学級担任以外の教員が学級指導に加わり、若手教員をサポートした。

学級担任ではない他学年部の通級指導教室担当教員の協力を得て「小さな道徳」を実施したが、道徳部会による資料やスライドの準備によって、スムーズに行うことができた(図8)。実施後の感想では、「生徒理解につながり、教育相談のきっかけになる。」「教材を使つての道徳科の授業も大切だが、日常生活での道徳を朝の会や終わりの会に実施することも必要だと思う。」という声が聞かれるなど、「小さな道徳」のもたらす効果や可能性を実感することができた。



図8 「小さな道徳」の実践の様子

(2) コミュニケーションの活性化を目指した取組

ア 日常的な対話の積み重ね

教職員の思いや考えを共有する場面をより多く設けるために、学年部や学年部外の教職員への声掛けを意図的に行った。また、道徳教育推進教師と連携し、自分自身も教員同士、学年部同士の「つなぎ役」としての役割を意識しながら、学年部所属教員と積極的に対話を積み重ねた。

自分自身が、研究対象の学年部に積極的に関わる姿勢を示したことがきっかけとなり、「今まで関わろうとしなかった学年部外の教員が、朝の会や終わりの会、給食指導に関わろうとするようになった。」という声や、「濱本教諭が学年部と学年部外の教員との橋渡しになっていた。」という声が聞かれた。道徳教育の実践を通して、「学年部や道徳科に限らず、お互いが良い意味で関わり合っていかなければならないと感じた。」という意見もあり、組織がよりよい形で機能するために大切な要素を改めて認識する機会となった。また、対話と協働を円滑に行うためには、「つなぎ役」を担う教員の存在が大きく、誰もがそれぞれの立場で教員同士の「つなぎ役」になり得ることを自覚する必要があると考える。

イ 教職員向け通信の発行

若手教員や学年部の取組の様子、研究の実際について、定期的に教職員向け通信を発行し、全体への周知を図った(図9)。研究への協力を仰ぐとともに、互いの頑張りを認め合う一つの情報共有のツールになることを目的として実施した。

教職員向け通信の発行については肯定的な意見が多かった。「私も頑張らなければならなかった。良い刺激になった。」「頑張っている姿を取り上げてもらうことで、生徒同様教員も自己有用感やモチベーションが向上した。」「若手教員が協力体制について記載してもらったことで、自分は一人じゃない、相談や協力をお願いできる先輩方がいるというソーシャルサポートにも気付くことができた。」という意見もあり、教員の自己有用感につながる取組の必要性を感じた。また、「通信で先生方が頑張っている様子を知り、分かっていたいなかったことがたくさんあった。改めて先生方の心遣いに感謝する。」「先生たちがどんな実践をされているのか、よく分かった。」という意見もあり、教

員一人一人の取組や頑張りについて、相互理解を深める一つの手立てになった。



図9 教職員向け通信

3 実践の検証

研究協力校の教職員を対象に、事前事後の意識調査を行った。

「道徳教育に関する意識調査」(図10)では、「道徳教育に対する学年部の意識・相談体制・協力体制」の観点において、他の学年部では顕著な向上は見られなかったにもかかわらず、研究対象の学年部では、全ての項目で事前事後の数値の増加が見られたことから、道徳教育の取組における学年部の同僚性は向上したと考えられる。

調査項目	実施日	対象学年部	変化	対象外学年部	変化
1 道徳教育や道徳科の授業について、よく話題になる。	事前	2.667	↑ 0.333	3.000	▼ -0.385
	事後	3.000		2.615	
2 学年部内で意義や方針について共通理解が図られている。	事前	3.000	↑ 0.500	3.286	▼ -0.209
	事後	3.500		3.077	
3 授業の進め方について、教師間で共通理解や連携を図るための機会がよくある。	事前	2.833	↑ 0.417	3.286	▼ -0.119
	事後	3.250		3.167	
4 道徳科の授業について困りごとがあったとき、学年部で気軽に相談できる。	事前	3.167	↑ 0.333	3.643	— -0.028
	事後	3.500		3.615	
5 学年部や学校では、互いに同僚のよさを積極的に認め合おうとしている。	事前	3.333	↑ 0.167	3.500	▼ -0.115
	事後	3.500		3.385	

図10 道徳教育に関する意識調査

研究協力校のヒアリングやアンケート結果から、同僚性を高めるために必要だと考えられる要因は「ビジョンの共有」「情報交換の場の設定」「教員同士が積極的に関わろうとする姿勢」「「つなぎ役」を担う教員の存在」であると考えられる(表1)。

若手教員が課題意識を持っている道徳科の授業において、授業スタイルなどの「ビジョンの共有」を行うことは、共通認識を図り、同じ方向性で取り組む上で重要であったと感じている。「情報交換の場の設定」を意図的に行うことは、道徳科に限らず教育活動を進めたり、同僚関係を構築したりす

る点において大切であると再認識することができた。また、研究を進める上でベースとなったのは、「教員同士が積極的に関わろうとする姿勢」である。教員同士が積極的に関わろうとすることは、互いのことを知ろうとする相互理解の始まりであり、よりよい組織づくりにおいて欠かせない要素だと考える。そして、若手教員を含めて教員全体が組織としてより一層の連携を深めるためには、教員同士が対話と協働を日頃から積み重ねていく必要があり、そのためには、「つなぎ役」としての役割を意識的に果たす教員の存在が大きな意味を持つことも実感した。

表1 同僚性を高めるために必要だと考えられる要因

要因	要素（取組・姿勢）	実践
ビジョンの共有	研修の機会の提供	道徳科についての研修の実施
	研修講師の招へい	研修を通しての共通理解、指導力の向上
	共通の形式を用いた授業づくり	授業スタイル、授業構想シートの作成・提示
情報交換の場の設定	話し合いの場の設定	「リレー道徳」での打合せ
	学年部を超えた教員同士の組織的な連携	道徳教育における学年部外の教職員の関わり
教員同士が積極的に関わろうとする姿勢	若手教員とともに取り組もうとする姿勢	「リレー道徳」の準備
	共に学び合い、自分自身を見つめ直す機会の提供	「リレー道徳」の実施
	自ら積極的に関わろうとする姿勢	教育活動における取組全般
	教員同士の日々の声掛け	日々の教職員間の意識的なやり取り
	個々の教員の意識変容	研究における取組全般
「つなぎ役」を担う教員の存在	実践や取組の可視化	通信の発行
	相互理解を深めるための手立て	道徳教育を通じた教職員の関わり、通信での取組紹介
	教員の自己有用感につながる取組	通信での肯定的な紹介
	「つなぎ役」としての教員への働き掛け	「つなぎ役」を意識した取組全般

4 研究のまとめと今後の課題

「リレー道徳」を柱とした授業実践等を通して、若手教員を支援しながら協働的な取組を積み重ねることで、道徳教育における学年部の同僚性は向上した。同僚性を高めるには、若手教員を始め学年部が課題だと感じている教育実践を理解し、「ビジョンの共有」「情報交換の場の設定」「教員同士が積極的に関わろうとする姿勢」を意識しながら、その課題解決のために組織的に取り組むことが重要であると考えられる。そして、同僚性の向上には、日常的な対話の積み重ねが必要不可欠であり、教員一人一人が各々の立場で、教員同士、学年部同士などの「つなぎ役」になり得る存在であることを自覚し、互いに関わり合おうとすることが大切であると考えられる。

道徳教育における同僚性の向上を実感した一方で、本研究を通して、同僚性は時間を掛けて構築されるものであるとともに、教員一人一人にはそれぞれに抱えている事情があり、協働的な取組を日常的なものにするの難しさも痛感した。しかし、だからこそ、同僚性を向上させる手立てを意図的に仕組み、継続して取り組む必要があるとも考える。学校という組織の中で、教員のよりよい協働が生徒たちの成長に良い影響をもたらすことを意識し、自分自身も「つなぎ役」としての役割を自覚しながら、同僚性を高められるよう尽力していきたい。

主な参考文献

- 横山利弘『道徳教育とは何だろうかー道徳をどう解くー』暁教育図書 2013
- 長澤和馬・堀江伸「同僚性が高まる校内研究の実践的研究ー学年教師集団によるカンファレンスの連環を中心にー」『滋賀大学教育実践研究論集』2021
- 文部科学省『令和3年度道徳教育実施状況調査（報告書）』2022
- 牧崎幸夫・広岡義之・杉中康平『楽しく豊かな「道徳の時間」をつくる』ミネルヴァ書房 2015
- 鈴木健二『学級経営に生きる 5分でできる小さな道徳授業』日本標準 2021